

## 歴戦の下士官たち

B 收容所に移って二十日くらいした頃、医務室で面白い軍曹に出会った。「今晚は」と気やすそうにいうので「やあ」と挨拶したが、私が「何しにきたんだ」と聞くと、「ちよつと、梅毒の治療にきました」と簡単に言う。私はB收容所では新参者なのでT少尉に尋ねたら変わった男だと言う。月例身体検査で彼の兵舎に行った時、この軍曹は塵紙にペツと唾を吐いて「自分はこんな痰が出ます」と私に見せた。血痰が出ていた。私は「肺ジストマだろう」といったらその診断が当たっていて、以来、この軍曹の信頼を得た。

付き合つて見ると、実に愉快な人間である。この男のことを考えると自殺したいなどという気持ちは微塵もなくなってしまう。彼は北支軍にいた軍曹で奇妙な経歴の持ち主であった。彼は下士官候補者教育隊を八十五人中八十三番で卒業したと言っていたが、私が「あとの二人はどんな人か」と聞いたら「入院していた」とのこと、私が「それなら、I軍曹（彼はIとい

う姓であつた)がドンケツではないか」と言つたら、彼は八十三番で尻から三番目だと言ひ張つて譲らない。彼は学科試験は椅子(布張りの椅子で布が破れていた)の中に典範令を入れておいて問題に対する答えはそれを丸写ししていたので百点のはずだと言う。よほど、軍隊における起居動作即ち、内務の成績が悪かつたに違ひない。

高等小学校を卒業した後は、放蕩な生活を送つていたようである。満州に行くと言つて親類から餞別を掻き集め、満州に行かずに家でブラブラしていたら、親類の者が彼の父に「何故、貴方の子供は満州に行かないのか、餞別も渡したのに」と告げ口され、父から勘当を言い渡された。その後はメリケン粉と魚粉を混ぜて、小さな丸薬を作り、薬と称して売り歩いて、薬事法違反で警官に追ひ掛けられたり、工夫になつて北海道のタコ部屋に身を売り、前借を踏み倒して逃げたり、兵隊に成るまでは、色々な事をしていたらしい。私が「君に良く軍隊が勤まつたなあ」と言つて感心したら「軍隊くらい面白い所はありませんや、放火、殺人、強盗など意のままですからなあ」との返事が返つてきたのには呆氣にとられた。

この軍曹の部隊長もなかなかの人らしく北京の料理屋で飲み食いしても金を払わない。料理屋の者が文句を言つと、「誰のお陰で商売が出来ていとおもうのか」と言つて一喝するのだそう。

北支でI軍曹と同じ部隊に居たT大学の哲学科を出たWという姓の少尉がいたが「北支の治

安が巧く行かなかったのは「I軍曹のせいだ」と話していると、T軍医少尉が冗談であろうが、時々、笑いながら話してくれた。

T大哲学科出身のW少尉は敬虔なクリスチャンであった。I軍曹がW少尉のところに遊びに来て、W少尉から「公教要理」という本を借りて読んでいたが「こりや、俺には出来ない。一つ、汝、姦淫する勿れ。これは駄目だ。一つ、汝、他人の妻を恋する勿れ。これは難しい」と歓声を上げたとき、暫く笑い話の種になった。I軍曹は私に「軍医殿、野糞をする時はキンピラバラで尻を拭いてはいけませんよ。あれはツルツル滑って巧く行きませんから」と親切に教えてくれたりしてくれた。I軍曹が淋病で北支の陸軍病院に入院していた時の話もちよつと変わっている。やかましい看護婦がいて、あんまり腹がたつので、I軍曹が彼女の飼っていた小犬を二階から投げたらキャンといつて死んで、看護婦から連絡を受けた軍医から叱られたそうである。

退院した患者の空きベッドに毛布を丸めて入れ、面洗器も使つてあたかも病人が寝ているように見せかけると、看護婦が熱を測りにきて、必ず声を掛けるので、その時、入院室の患者がワーツと囁たてて看護婦を泣かせたり、怒らせたりするのだというのだからかなわない。

この北支で戦闘した部隊の兵隊からは学ぶことが沢山あった。E曹長の話では戦闘で部下の兵隊が敵弾に当たって負傷したら、自分が戦死する危険があつてもその部下を救いに行かなければ

ればならないと言っていた。そうしなければ兵隊が翌日から動かないのだそうである。E曹長は北支で戦闘中、後退命令が出て、後方に下がって行く途中、ふと見ると部下の一等兵が敵弾に当たり倒れたので、敵弾の激しい中をその兵隊のところまで引き返したら、その兵隊は運の良いことに水筒を射ぬかれていただけであった。水筒には酒が入っていて、漏れている酒を敵弾の飛んで来る中でグイグイ飲んでいたので「貴様、何をしているのか」と言って、ブン殴って連れて帰って来たことがあるというから、たいした兵隊もいたものである。

ある時、E曹長は<sup>おどり</sup>凹部隊となった。日本軍が作った包囲網の中に敵兵を引き付ける役目をしなければならぬ。敵が攻めて来て、頃はよしとみて、退却を命じ、狭い一本道を後ろの山までおお急ぎで後退し始めたら、先頭を走って行く兵隊が銃を右、左に振り回して、銃で殴られるような気がして、その兵隊より前に出ることが出来なかった。戦闘が終わってから、その兵隊に「何故、銃を右、左に振ったのだ」と、尋ねたら、その兵隊は自分のしたことを全然覚えていないので呆れたと話していたが、戦争とはそんなものかもしれない。

ある日の白兵戦では、部下の兵隊が二人の敵に銃剣で突きさされがかり、両手に敵の銃をしっかりと握り締めて「分隊長殿」と言って、泣いていたので、飛んで行って敵を刺殺して部下を助けてやったことがあるとも言っていた。また、ある時などは、分哨勤務についていて、退屈なので、夜、天幕を張った窪地の中に徹夜でマージャンをして、朝、よく見たら、近くを敵の大

部隊の通った跡があり、さすがに、この時は豪気なE曹長も肝を冷したとのことであつた。I軍曹もE曹長も実戦部隊なので私達の想像出来ない体験をしている。中隊長と喧嘩して腹が立ったので、中隊長室の横でラッパ手に一晚中ラッパを吹かせて、中隊長を寝かせなかったこともあつたらしい。うまいことを考えたものである。

陸軍には陸軍刑法と言う恐ろしい法律があつて、その中に上官侮辱罪という罪がある。要するに上官に対して礼を失うようなことをしたらいけないのである。また、面前侮辱というのがある。面と向かつて侮辱したら罪になるのである。そこで、面と向かつてではなく、電話でならよいだろうと考えて、上官を電話に呼び出して悪口をいったら、面前侮辱となつたそうだ。上官の背後ならよかろうと、上官の悪口を言つたりした者もいたそうだが、矢張り面前侮辱になつたと聞いた。酒の席で少将の顔を顎から鼻を通り額まで舐めた少佐も上官侮辱となつた。ちよつとしたことが上官侮辱となるので油断できない。その点、ラッパを中隊長の部屋の横で吹くのはどれにも該当しない。法律にも抜け穴があるし、兵隊もその点をよく知つて巧く利用したのには感心した。

I軍曹とE曹長とは同じ部隊であり仲が良かった。彼らの古参下士官が一夜マージャンをしているのを見て、驚いた。完全に盲牌で、しかも伏せ牌でやっている。本当に「あがれる」のだろうかと思つてみると、I軍曹が上がつた。後ろから牌を見ていると出たらめに置いてある

が、私が牌を頭の中で並べ替えて見ると確かに上がりである。もう名人芸としか言いようがない。伊達に軍隊の飯を食っていたのではないことが分かった。何度見ても同じであった。私達より遙かに頭がよいのではないかと思つた。

何時だったか、また、どうしてだか分からなかったが、私達の収容所で五、六人の将校を残して、隊長のM大尉以下ほとんどの将校が何処かへ移動して行つた。それで曹長が中隊長の職務をとるようになった。風の便りによると近くの収容所で労働作業をしているらしいということがわかつた。話ではこの将校の人達は砂糖の俵の運搬をしている時、コッソリ俵の中に棒筒を突っ込んで砂糖を吸い込んでいて、砂糖が吸い込めなくなつたので、どうしたかと思つたら、口の中が砂糖で一杯になつていたと言う笑い話も飛び込んできた。砂糖を毎日吸い込んでいるので便が粘液状になつている将校もいるそうだという噂も聞いた。どこまで、真実かわからないが、こんな風評は案外あつていることが多い。

驚くことに、このシベリヤの果てにいて、日本の内地の様子が分かるのである。ソ連の将校から短波ラジオの修繕を頼まれた日本の通信隊の将校がラジオを修繕している時に日本の放送を聞き、それを誰かに話し、聞いた兵隊がまた誰かに喋り、それが繰り返され、駅で働いている兵隊の耳に入り、駅を通過する列車に乗っている兵隊が知り、私達の街の駅で仕事をしている兵隊が聞き、私の知るところとなるという経過になるのである。書けば長いが、実際には左

ほどの時間は掛からない。

私が次に行ったC収容所に「お喋りの碌」と言われるくらいの「金棒引き」がいたが、彼にソ連の民間人が日本人の内地送還が行われ始めたことを話した。これは私にとつても「お喋りの碌」にとつてもまた、収容所の他の人びとも初耳であつた。「お喋りの碌」から他の兵隊の耳に入り、私を知るまで何分掛かるか計ってみようと思つた。四十三分しか掛からなかつた。如何に早く流言蜚語が広まるかこれでお分かりのことと思う。色々な風評は案外当たつてゐることもあるのである。

砂糖はB収容所で昭和二十一年の一月頃から入院患者一名につき一日三〜五グラム？支給された。仮に五グラムとしておこう。入院患者五十名の一カ月分を衛生兵が貰つて来たが、保存場所がない。止むを得ず紛失、盗難を防ぐために医官室に置くことにした。私とT少尉と当番兵しか出入りしないので一番安全な保管場所と思われたからである。医官室は二段ベッドになつていて私が上段に寝ていたので、私の足元に置いた。幅四十センチメートル、高さ四十センチメートル、長さ一メートルくらいの箱に砂糖は入れてあつた。それから毎日必要なだけ取り出して入院患者に渡した。十五日、即ち半月配給して、残つた砂糖の量を見て一驚した。五分の二くらいしか残っていない。私は砂糖は好きだが、患者の分を、取るようなさもないことはしない。T少尉も当番兵も、そんなことをする人間ではない。砂糖の減つた理由がサッパリ

分らない。大分考えた。誰も盗んでいないとすると、残るのは分配方法の誤りだけである。入院患者五十人の一人一日五グラムを、五十グラム入りの、取っ手付きの琺瑯引きの容器で渡していた。ここに何か「からくり」がなければならぬ。何だろう。

真剣にこの問題にとり組んでいるうちに、重量と容積を一緒くたにしていることに気付いた。今まで、一杯五十グラムとして計算していたが、掬う時に少し力を入れるのでギョツと詰め込まれ五十グラム以上入り、それを知らずに毎日渡していて、こんな差が出来たに違いないと思った。それなら、逆に容器に、そつと砂糖を入れたらよいのではないかと考えて翌日から私は砂糖の入った箱を入院室に持つて行つて床に置き、琺瑯引きの容器の中に、十センチメートルくらいから、ゆつくりと出来るだけ空気が入るように心掛けながら砂糖を落とし、必要量を渡した。私の思惑通りうまく行き、残りの十五日間、砂糖は品切れせずに済んだ。数学と物理学を勉強していて本当によかつたとしみじみ思つた。